



## これからの「共創」の時代に、 ユーザー・イノベーションの理論を 提示する

経営学研究科  
経営学専攻  
西川 英彦 教授

### Profile

1985年、株式会社ワールド入社、2001年、ムジ・ネット株式会社取締役就任、2004年、神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程修了、2010年4月より現職。2015年より株式会社ユナイテッドアローズ社外取締役。

### こんな研究室です

修士課程の留学生、社会人院生、博士課程の院生とともにゼミを実施しています。ユーザー・イノベーションやデジタル・マーケティング、デジタル・コンテンツなどをテーマに研究を進め、2015（平成27）年度は、全員が日本マーケティング学会のカンファレンスでの報告を果たしています。ゼミ自体が「共創」の場であり、外部の企業の方々とのコラボレーションなどを含め、オープン・イノベーションを心掛けています。



私は大学を卒業後、アパレルメーカーで営業職や新規事業に携わりながら、大学院でマーケティングについて学びました。そして、パリのESCP EUROPE（経営大学院）への留学を機に、「世界で戦えるブランド」を本格的に意識し、インターネットが急速に普及し始めた状況も踏まえ、ムジ・ネット株式会社へと転職しました。

ムジ・ネットは、無印良品を展開する株式会社良品計画のウェブ事業を担当する会社です。無印良品では、従来から消費者の意見を商品開発に取り入れてきましたが、さらにインターネットの活用により、双方向に意見を交わす商品開発のプロセスにまで広げ、「体にフィットするソファ」などのヒット商品を開発。後に「クラウドソーシング」と呼ばれる手法であり、これは世界的に見渡しても先駆的な成功事例といえます。

そして、2004（平成16）年に博士号を取得後、

研究者の道へと進み、それまでの経験を生かした「ユーザー・イノベーション」の研究に取り組み始めます。ユーザー・イノベーションとは自らの利用のため消費者によって商品が生み出される概念で、当時、世界的に見ても新しく、画期的な分野でした。私が選んだ具体的な研究テーマは、ユーザー・イノベーションがもたらす市場成果に関する研究です。

最近では、多くの消費財企業が新製品開発のプロセスにおいて、ユーザー・コミュニティの創造性に注目し、活用し始めています。ある時期まで、このようなパラダイム・シフトが非常に有望であることは認められながらも、「ユーザー創造製品」の実際の市場成果を「デザイナー創造製品」と体系的に比較する、という研究は存在しませんでした。私の研究はこの空白を埋めるもので、無印良品から入手した、ユーザー

とデザイナー（開発者）それぞれ同時期のアイデアによる製品のデータセットを比較検討しました。その結果、累計売上高や粗利益、製品寿命といった重要な市場成果指標において、より高い新規性を持つといわれるユーザー創造製品がデザイナー創造製品を大きく上回る事実が明らかになっています。

この調査については限界や課題も見られますが、新製品開発プロセスにユーザー・アイデアを統合する意義を訴えていることは確かです。今後は、ユーザー創造製品が消費者にもたらすコミュニケーション効果、あるいはユーザー・イノベーターと3Dプリンターなどを使い楽しみながら開発する「メイカーズ」といえるユーザーとの違いなど、ユーザー・イノベーションのメカニズムをさらに突き詰め、日本の企業や起業家が活用できる理論を提示したいと考えています。



### こんな研究室です

都市デザイン研究室では、美しく快適な都市を実現するため、その土地にふさわしいまちづくりの内容と方法を研究しています。研究対象は都心部から地方まで幅広く、都市をキーワードに、構想から実現可能性までを追究。テーマにより現地調査や実測調査を行うほか、有志によるまちづくりアイデアコンペへの応募や学会発表、各種講演会への参加など、アクティブに活動しています。

### Profile

1981年、東京藝術大学大学院美術研究科建築設計専攻（環境設計）修了後、株式会社日本都市総合研究所入社、2009年より現職。全国の拠点市街地の計画からデザイン調整まで、国の都市整備施策に関する業務に多数従事。

大学時代に建築を学ぶ中で、私のデザインへの関心は建築物単体から都市環境へと移っていきました。それは、人々の快適な暮らしや美しい環境を追究しようとする、建築物単体では限界が生じると考えたからです。そのため、私は大学院で環境設計を専攻し、修了後に株式会社日本都市総合研究所において都市設計コンサルタントとしてのキャリアをスタートさせます。この会社は、丹下健三都市建築研究所の都市デザイン部隊が独立して興したオフィスであり、丹下イズムの影響下と言えます。

丹下健三の都市デザインには空間造形に強烈な個性が見られますが、私はそれが「空から見た形へのこだわり」によるものと理解しています。通常では人の目に触れることのない空から見た都市の形が意識されているため、大きな魅力を放っているのです。

そういった、まさに「全体を俯瞰する」姿勢を私自身も肝に銘じ、これまでさまざまな都市デザイン、都市計画に関わってきましたが、なかでも「北彩都あさひかわ」の事例はその代表といえます。これは旭川市から受託した国鉄跡地開発事業で、1992（平成4）年のスタートから現在まで継続中です。

この事例は、86haの土地区画整理、忠別川の環境整備、忠別川への新橋架橋、国の合同庁舎の新設などを含む大規模事業ですが、最大のポイントは「函館本線および旭川駅の高架化」です。通常、鉄道会社の建築デザイン案件は鉄道会社のルートで発注されるところを、このケースではJR北海道との粘り強い交渉の末、駅舎設計から土木施設などの全体監修まで、私たちが手掛けることに成功しました。コンサルタントとしての苦勞の甲斐あり、2014（平成26）年7月に

グランドオープンを迎え、2015（平成27）年には都市景観大賞（国土交通大臣賞）と日本都市計画学会計画設計賞を受賞できました。

また、阪神淡路大震災の復興事業として進められた「HAT神戸」のマネジメントも印象深いケースです。これは2年間の短期集中型で、数多くのデザイナーが定期的に集まり、設計図を持ち寄りながら相互調整の末に都市をつくり上げるといった刺激的な現場でした。

このような都市デザインの実践において大切なのは、有言実行の行政施策の普及ですが、現在は往々にして建前主義や最小限の実行にとどまっています。私は数々の受託事業を手掛ける中、多くの都市整備に関する知識や経験を得ましたが、今後は研究者としてそれらを生かしつつ、行政施策のあり方を追求し、その方法論や参考例を整備したいと考えています。

## 人々の暮らしに優しく、 美しい都市環境をデザインする



デザイン工学研究科  
都市環境デザイン工学専攻  
高見 公雄 教授